Change！ vol.11
長崎大学病院

■ 看護部の“輝ける”挑戦

“きらきら”と病院改革支える力へ

長崎大学病院の職員の半数を占める看護部は、病院改革には欠かせない重要な存在です。職場の活性化や接遇改善、看護師教育など、新たな挑戦について幹部の２人に語ってもらいました。

病院長　河野　茂氏

こうの・しげる
1950年生まれ。長崎大学医学部卒。専門は呼吸器内科学。2009年４月より長崎大学病院長

風通しのよい職場づくりを目指す

河野氏　今秋から田添副看護部長が看護部長に就任されました。９月に他界された小林看護部長の代理として、これまで病院の運営などに務めていただきました。小林看護部長のご遺志を継がれて、どんな看護部を目指されますか？

田添氏　今、病院が音を立てて変わっている気がします。39年間、この大学病院を見続けてきた私にとっては心地の良い音に感じます。病院がいい方向に変わっていく期待感があるんです。全職員の半数近くを占める看護部職員のやる気は、病院の活性化に欠かせないものです。その大きな組織を預かる看護部長の職責は重大ですので、気持ちを引き締めて務めていきたいと新たにしました。

就任の日に32人の看護師長一人一人を回った際、これから一致団結して協力してやっていこうという気概にあふれ、機が熟している印象を受けました。職員一人一人が活かされていると感じる職場を目指し、長崎大学病院で誇りを持って働いていけるような看護師を育てていきたいです。その鍵を握るのは、各看護師長のマネージメント力です。師長たちとの気持ちの乖離がないように、風通しのよい看護部にしたいですね。

河野氏　若い人たちは自分の思うような場所で働けないことも多く、不満があると思います。しかし、いろんな経験をして育っていくものです。看護部はそういう若手の声を吸い上げつつ、うまく育ててほしいと願っています。

江藤氏　私は安全管理部に２年いましたので、現場を少し離れた場所から病院をみる機会をいただき、とても勉強になりました。病棟にいるときは医師と看護師で病院を支えていると思っていましたが、安全管理部で事務の方の陰の力を感じました。

田添氏　職場の活性化のために、看護部では「同じ一日なら楽しく働きましょう」というコンセプトの下、平成20年３月から「フィッシュ哲学」を取り入れました。低迷していたアメリカの魚市場から生まれた職場の意識改革の哲学です。感謝の言葉を書いたカードを募り、その枚数が月間で多かった人にキャラクターの特注ぬいぐるみを授与しています。看護師だけでなく、医師や事務の方など少しずつ病院全体に広がっていますね。

外部講師招いて接遇改善へ

河野氏　看護部長は副病院長でもあり、接遇担当としての任務があります。接遇は病院として大事ですが、どのように取り組んでいますか？

田添氏　接遇では職員一人一人の対応能力が問われます。患者さんを大事にしている病院を印象付けるには、接遇の向上なしに考えられません。院内の自助努力だけでは限界もありますので、外部の講師にご指導に来ていただきました。

江藤氏　外部の先生が研修に来られた日は、朝から終日ずっと院内ラウンドをして、その都度、患者さんの目線に立った指摘をしてくださいます。事務部の各課長さんたちにも同行いただいており、迅速な対応で、次の日には改善されています。とても積極的です。

河野氏　今、大学病院は工事で患者さんにご不便をおかけしていますが、職員が廊下の各コーナーに立ち、迷ってらっしゃる患者さんに気付いたら積極的に声をかけている姿を見かけますね。大学病院が民間病院のような気持ちで患者さんに接していると、皆さんから驚かれますよ（笑）。非常によかったなと思っています。

看護部長　田添 京子氏

たぞえ・きょうこ
1951 年生まれ。
長崎大学医学部附属看護学校卒。
同大学歯学部附属病院看護部長などを経て、2010 年 10 月より現職

専門・認定看護師をリーダーに研修充実

河野氏　大学病院は昨年から若者が集う病院を目指して、若手医師の雑用の軽減に取り組みました。点滴静注を看護師に、看護師の仕事の一部をヘルパーさんにというように医師、看護師の役割を見直しました。看護部としてはいかがでしたか？

田添氏　安心安全に業務を移行することが大事でしたので、職員の技術向上のためにトレーニングを始めたり、全職員に周知して同意を得たりしながら業務の整理を進めました。700 人を超える看護師がいますが、技術が必要な導尿カテーテルのトレーニングを強化して、技術習得に許可を出したところ、９割近くがパスしました。業務の移行はスムーズだったと思います。

河野氏　最近では看護師さんにも認定の制度がありますが。

副看護部長　江藤 栄子氏

えとう・えいこ
1954 年生まれ。
九州大学医療技術短期大学部看護科卒。2009 年４月より現職。

江藤氏　大学病院には博士課程の大学院卒業の専門看護師が２人います。感染症と精神の分野です。また透析、不妊症、認知症、救急看護など、専門的な知識や技術を習得した 21 人の認定看護師がおり、リーダーとして活躍しています。

河野氏　大学病院の若い看護師の教育はどのようになっていますか？

江藤氏　本年度から国の制度で新人看護職員研修事業がスタートし、新人看護職員の教育を充実させる予定です。前に述べました通り、大学病院は専門看護師や認定看護師がおり、教育も充実していますので、ほかの病院の看護師の育成にも貢献できると信じています。そのようにして看護師のレベルを上げていくことが必要ではないでしょうか。

河野氏　そうですね。県外からも優秀な看護学生を大学病院に入れて、ここで育った方が地域の病院に行って指導的な役割を果たしていただいたら、これが理想ですよね。大学病院が吸引力を持って、若い医師や看護師を育てていけたらと思います。

　最後に若い看護師たちに求めることは？

田添氏　昔から看護師は３Ｋ「危険、汚い、きつい」の職場といわれていました。私にとって３Ｋは「きっと、きらきら、輝ける」なんです。教育機関としての大学病院の役割を理解し、後輩を育てる意志を持った看護師、高度先進医療機関としての大学病院の使命を果たせるよう自己研鑽に努められる看護師、効率的な医療提供を目指すことで経営参画できる看護師、このような人たちを求めています。